

## 地域社会における剣道指導者の実態と指導意識

### Study for Kendo Instructors' Practice and Their Sense of Instruction In Local Communities

氏家道男\*, 太田昌孝\*, 古谷洋一\*\*, 右田重昭\*  
矢野博志\*, 小森富士登\*\*\*, 角田直也\*\*\*\*

Michio UJIIE \*, Masataka OTA \*, Yoichi FURUYA \*\*, Shigeaki MIGITA \*  
Hiroshi YANO \*, Hujito KOMORI \*\*\*, and Naoya TSUNODA \*\*\*\*

#### ABSTRACT

This study refers the Kendo Instructors' practice and their sense of instruction in local communities. We provided and collected questionnaires from 191 Kendo instructors, who are involved in teaching Kendo in different local communities, and found the following trends of the practice and sense in their teaching activities by reviewing the collected questionnaires;

1. The Kendo instructors are, in general, teaching more numbers of pediatric generations including elementary school than any other generation in local communities.
2. They teach the trainee more basis-oriented technique such as basic actions, "uchikomi" and "kakari-keiko", which are required to master at the initial stage of Kendo training.
3. The instructors in the local communities may not put the top priority for winning the Kendo competitions in their teaching practice.
4. The cause of their instruction activities seem in many cases more like from voluntary contributions to the local societies.
5. In order for Kendo to get more popularity in high-skilled level in the public in the future, it seems most critical to train more numbers of high-quality instructors.

---

\* 国士舘大学体育学部武道学科 (Dept. of Budo, Physical Education, Kokushikan University)

\*\* 国士舘大学政経学部 (Faculty of Economics, Kokushikan University)

\*\*\* 国士舘大学武道德育研究所 (Institute of Budo and Moral Education, Kokushikan University)

\*\*\*\* 国士舘大学体育学部身体運動学教室 (Lab. Of Biodynamics & Human Performance, Physical Education, Kokushikan University)

## 【はじめに】

わが国の学校体育において、「格技」の名称が平成元年に「武道」に改められたことは、周知の通りである。これは戦後、柔道剣道などの武道がスポーツとして再開されてから37年経過し、武道のもつ文化的・教育的意義が見直されたと考えてよい。その内容としては「我が国の伝統的な運動文化としての武道の特性を一層明確にして、効果的かつ継続的な指導を基本方針」<sup>1)</sup>としている。

特に、剣道に関しては、昭和51年にその本質を見直す理由で「剣道理念」や「剣道修行の心構え」が制定され、剣道指導の指針が明確に表示されている。この様に、武道指導の充実が学校体育のみならず社会教育からも求められたということから考えても、これまでの剣道指導の考え方等が今後ますます重要性を帯びてくると考えられる。一方、剣道の現状を見ると剣道本来の姿や剣道が持つ教育的価値というものが剣道指導上活かされていない現状にあり、文化的価値の忘失・武道精神の希薄化<sup>2)</sup>、スポーツ化による試合偏重主義傾向<sup>3)</sup>、少子化に伴う剣道人口の減少問題<sup>4)</sup>等「武道としての剣道」普及には様々な課題が山積みされていると思われる。これは、剣道理念と指導者の剣道観における意識の相違があることに他ならない。よって、現在の剣道指導者の実態及び意識や考え方を把握し検討してゆくことは、剣道の普及・発展を目指す上で急務であると考えられる。

これまでの剣道指導者に関する研究をみると、田中ら<sup>2)</sup> 7) 8) 松村ら<sup>5)</sup> 飯塚ら<sup>13)</sup> は高校剣道指導に関する指導目標と指導者の属性等についてまとめ、武田ら<sup>6)</sup> 10) 11) は体育教師にみられる剣道指導の特徴について報告をしている。また、前田<sup>14)</sup>、田方ら<sup>15)</sup> は女子指導者の意識について調査し、浅見ら<sup>9)</sup> は学校指導者と道場指導者の比較を報告している。しかし、これらの対象の多くは学校体育に携わる剣道指導者と女子指導者がほとんどであり、地域社会における多種多様な職業の剣道指導者を対象とした知見はほとんど報告されていない。

い。

そこで本研究では、主に地域社会の青少年を対象にして剣道を指導している指導者の実態調査を実施し、地域社会における剣道指導の現状の把握と問題点を明確にすることから「地域社会の変化に対応できる剣道」のあり方を検討することを目的とした。

## 【研究方法】

調査時期：1995年10月、1997年1月

調査対象：全日本剣道連盟公認「社会体育指導員（準指導員）」・文部大臣認定「社会体育指導者（地域スポーツ指導者）剣道」養成講習会に参加した剣道指導者を対象に実施した。参加者は、関東各都県を中心に地域社会で剣道指導に携わっている217名（1回目123名・2回目94名）である。

調査方法：本研究では、質問紙法による調査用紙を講習会に参加した剣道指導者全員に直接配布し講習会最終日に回収した。回収数は、199（1回目114と2回目85）枚であったが指導経験が無いもの、あるいは全項目について一つでも未記入があった調査用紙は除外したため、分析対象となったのは191枚であった。

調査項目：剣道指導者の年齢・段位・職業・剣道歴・指導歴及び剣道指導に関する20項目から構成されていた。

## 【結果と考察】

## 1. 地域指導者の剣道経歴について

表1は、地域指導者の年齢、職業、経験年数、段位、練習回数、練習時間の結果を示したものである。

1) 指導者の平均年齢は、52.9歳 (SD.8.71) で

あり、50歳以上が全体の64.4%を占めた。また、60歳以上の指導者が42名、70歳以上も6名と多くの高齢者が指導に関わっており、生涯剣道としての一端がみられた。

- 2) 剣道経験年数においては、平均が28.2年(SD.10.15)であり、全体的にみると経験年数が7年から60年間で非常に広範囲であることが特徴である。

表1 地域指導者の剣道歴

	平均	SD	人数	比率
年齢	52.90	8.71		
性別 男			173	
女			18	
職業				
会社員			76	39.8
自営業			34	17.8
公務員			43	22.5
主婦			9	4.7
その他			29	15.2
剣道経験年数	28.21	10.15		
指導者の段位	5.79	1.03		
3 段			5	2.6
4 段			14	7.3
5 段			53	27.7
6 段			63	33.0
7 段			56	29.3
指導者の練習回数(1週間)	3.21	1.39		
1 回			10	5.2
2 回			49	25.7
3 回			75	39.3
4 回			25	13.1
5 回			21	11.0
6 回			6	3.1
7 回			5	2.6
1回の練習時間	81.15	29.15		
30分程度			17	8.9
60分程度			82	42.9
90分程度			56	29.3
120分程度			30	15.7
150分以上			6	3.1

- 3) 職業別内訳については、会社員が76名(39.8%)と最も多く、次に公務員43名(22.5%)、自営業34名(17.8%)で、それらは全体の8割を示している。

- 4) 指導者の段位については、3段から7段まで存在し、平均段位は、5.79段(SD. 1.03)であった。取得段位の中で最も多かったのが6段で63名(33.0%)であり、次に7段56名(29.3%)、5段53名(27.7%)、4段14名(7.3%)、3段5名(2.6%)の順であった。

- 5) 1週間の練習回数をみると2から3回が124名(65.0%)で最も多く、次に4回が25名(13.1%)、5回で21名(11.0%)の順であり、平均練習回数では3.21回(SD. 1.39)であった。

- 6) 1回の練習時間では、60分程度が82名(42.9%)で最も多く、次に90分程度が56名(29.3%)、120分程度30名(15.7%)と続く。平均練習時間は81.15分(SD. 29.15)であった。

表2は、剣道指導経歴に関するもので指導対象、指導回数、指導時間を示したものである。

- 7) 指導対象として最も多いのが幼・小学生の指導で全体の115名(60.2%)を占める。複数指導及びその他を除いた割合でみると78.8%となり、地域指導者の約8割が幼・小学生の指導に集中している。この年齢層の指導は、将来の剣道を左右する最も重要な時期だけに、地域指導者の役割と重要性は計り知れないものがあると考えられる。
- 8) 1週間における指導回数が最も多かったのは、2～3回で132名(69.1%)であった。次に1回32名(16.8%)、5回11名(5.8%)と続き、平均指導回数では2.59(SD. 1.24)であった。
- 9) 1回の指導時間をみると60～90分程度が129名(67.5%)と最も多い値を示してい

表2 地域指導者の指導歴

	平均	SD	人数	比率
指導対象				
幼・小学生			115	60.2
中学生			10	5.2
高校生			1	0.5
大学・一般人			17	8.9
成人女子			3	1.6
複数指導			40	20.9
その他			5	2.6
指導回数(1週間)	2.59	1.24		
1 回			32	16.8
2 回			68	35.6
3 回			64	33.5
4 回			10	5.2
5 回			11	5.8
6 回			3	1.6
7 回			3	1.6
1回の指導時間	90.73	34.60		
30分程度			7	3.7
60分程度			70	36.6
90分程度			59	30.9
120分程度			42	22.0
150分程度			4	2.1
180分以上			9	4.7

る。これは、指導者の剣道経歴の練習回数及び練習時間と類似していることから、指導日に合わせて指導者個人の練習も計画していると考えられる。次に120分が42名(22.0%)、180分以上おこなっている者が9名(4.7%)認められた。1回の平均指導時間は90.73分(SD. 34.6)であった。

## 2. 剣道指導の動機

図1は、剣道を指導するようになった動機を示したもので「剣道を活かしての地域社会への貢献」が28.3%、「剣道を活かしての地域社会への参加と交流」が17.3%、「剣道の素晴らしさを一人でも多くの人に学んで欲しい」14.1%と積極的な回答が多く見受けられた。特に、地域社会に関連した理由によるものが高率を示した点は興味深いところである。これに対して「何となく成り行きで」が8.4%、「知人の推薦」7.9%と値は低いが消極的な回答も見受けられた。消極的な回答者には、女性指導者が多く、3人に1人の割合を示したことは注目すべき点である。ただし、今回は女性指導者の対象者が少数だったことなどから、今後は女性指導者を増やしたうえで、さらに詳細な調査分析を試みるべきであると考えられる。また、男性指導者との比較検討も重要になると思われる。

この剣道指導の動機を会社員、自営業、公務員

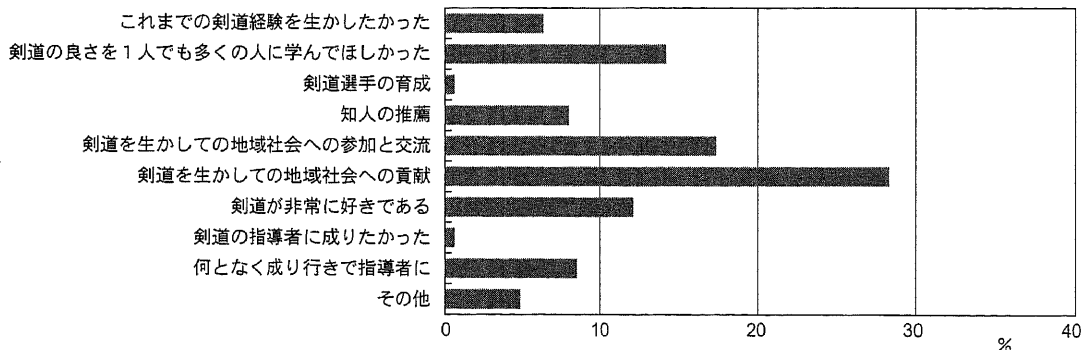


図1 剣道指導の動機

の職業別で比較してみると（図2）、自営業群に特徴がみられ「剣道を活かしての地域社会への参加と交流」が回答者ゼロに対し「剣道が非常に好きだ」という指導理由が高い割合を示す傾向がみられた。これは、自営業群は地域そのものが生活の場であるところから、地域に対する貢献及び奉仕志向が高いと考えられる。また、会社員・公務員群では、生活時間の多くが移住地域以外で過ごすため、帰属意識が反映されていると考える。

### 3. 剣道指導上の重点項目

図3は、剣道を指導する上で特に時間を費やす事項を図示したものであるが、一見して分かるよ

うに「基本動作」（30.9%）と「打ち込み・掛かり稽古」（27.4%）の指導に最も重点をおいていることが明らかである。次に、ほぼ同じ割合で「技の練習」（15.9%）と「地稽古」（15.5%）が続いている。「日本剣道形の練習」（4.7%）と「試合練習」（2.3%）に関しては、割合が低い傾向にあった。一般的傾向としては基本動作、打ち込み・掛かり稽古に主眼をおき、試合勝負に捕らわれない練習形態をとる傾向が極めて高い。注目すべきは、全体的に剣道形を重要視していない傾向、あるいは剣道形に対する関心度の低さが認められる。理由としては練習時間が短いなど様々あるように推察されるが、今後検討の余地があると思わ

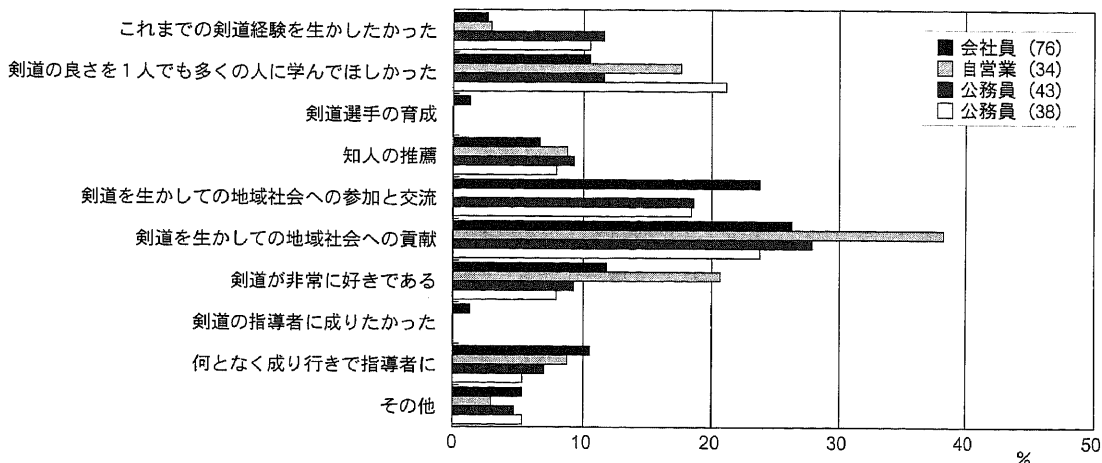


図2 職業と指導動機

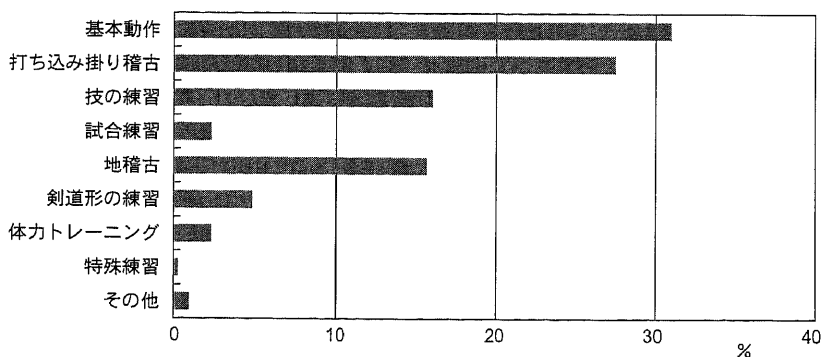


図3 剣道指導上の重点項目

れる。

この重点項目を指導年数で比較したのが図4である。高率を示した4項目については、顕著な差は見られないが「試合練習」の項目では、指導年数が少ないほど高い値を示し、指導年数30年以上群においては回答「ゼロ」であった。試合練習は、興味を喚起する上で重要だが、ややもすると競技剣道に偏る危険性も拭えないと考える。しかし、指導年数30年以上群においては、試合を度外視した魅力ある指導法が備わっていると考えられる。

「剣道形の練習」においては、指導年数が多いほど高い値を示す傾向にある。これは、長い指導経験の中で剣道形の持つ理合等々を十分に理解し、重要視している点にあると考える。

「体力トレーニング」の項目をみると、指導年数30年未満群では僅かながら体力トレーニングを取り入れた練習形態を取っているが、指導年数30年以上群の場合体力トレーニングに対する重要度は皆無であった。この差は、指導年数30年未満群が自らの経験を元に、体力トレーニングを身近に感じている点と剣道と体力トレーニングが密接かつ必要不可欠なものとしてとらえており、実施されてこなかった時代背景をもつ指導年数30年以上群との差が現れていると考えられる。

#### 4. 指導方針及び目標について

図5は剣道の指導方針及び目標について調べた結果を図示したものである。これから明らかなのは、「正しい基本と技の修得」(19.4%)、「礼節・しつけの修得」(16.8%)、「社会性豊かな人材の育成」(10.8%)において高い割合を示している。これは、全日本剣道連盟が制定した「剣道修行上の心構え」<sup>15)</sup>の内容と合致するところである。反面、ただ単に剣道の特性や特色及び効果ばかりを求めることで、剣道継続の意欲を損なうことのないように、剣道指導者としては「面白さ・楽しさを加味した指導」「個性を大切にした指導」など興味あふれる指導内容を盛り込む工夫も決して忘れてはならないだろうと思われる。

「競技力の向上」(1.4%)と「昇級・昇段」(0.3%)が極めて低率を示したのは、先の剣道指導上の重点項目で示した「試合練習」と「剣道形の練習」との関連性を考えれば当然の結果といえよう。

この指導方針及び目標を各段位ごとに比較したものが図6である。「正しい基本と技の修得」では、7段群が最も高い割合で肯定し、段が低くなるにしたがい低率になる傾向がみられた。これは、段が高くなるにしたがい高年齢になっても継続可

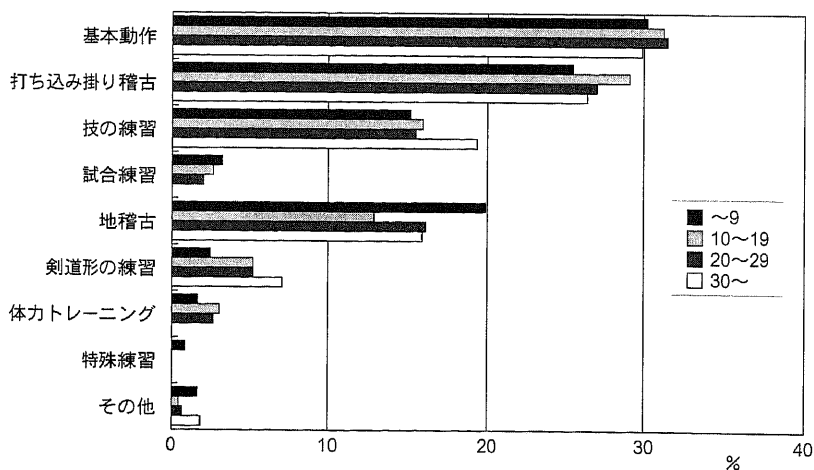


図4 指導年数と重点項目

能な剣道、すなわち生涯を通して行える剣道を志向した際、幼少の頃から正しい基本と技の修得をさせようとすることの重要性を示しているものと考えられる。

「礼節・しつけの修得」においては、4段以下

群が最も高く肯定し、段が上がるにしたがい低い割合になる傾向にある。また、「社会性豊かな人材の育成」では、5段群指導者が最も高い割合を示し、「精神的成長」においては4段以下群指導者から、かなりの割合で肯定されていることが認

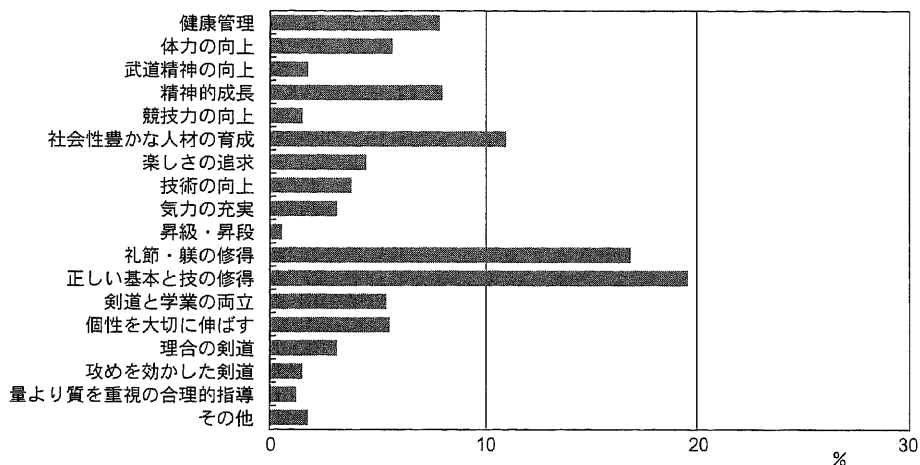


図5 剣道の指導方針・目標

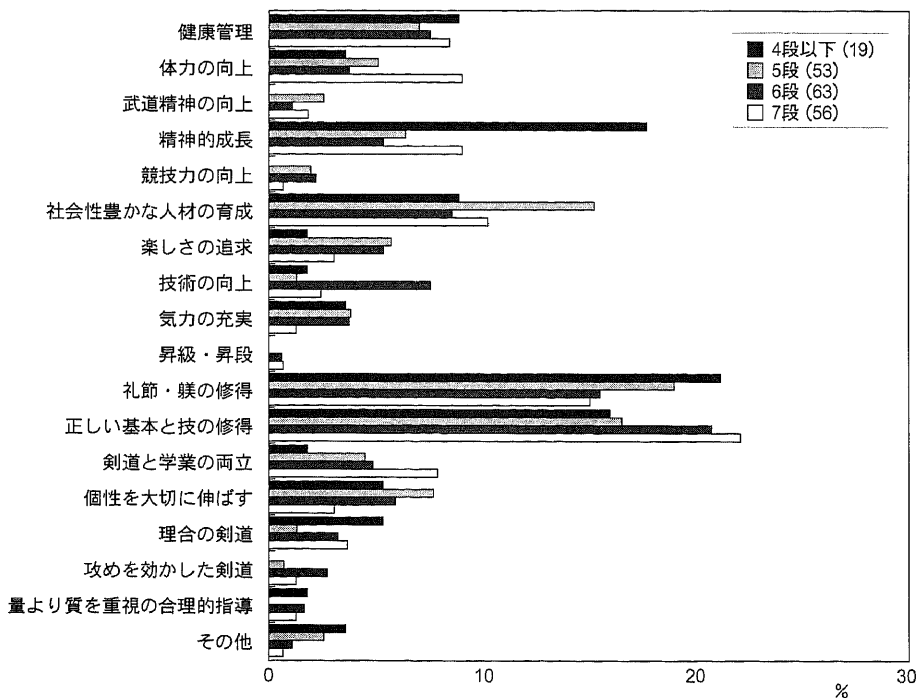


図6 段位と指導方針・目標

められた。

5. 将来、剣道が発展するための問題点と改善点

将来、剣道が発展するための問題点と改善点についての結果を示したのが図7である。もっとも高い割合を示したものとして「優秀な指導者養成」(14.8%)を第1にあげている。これについては、小沢ら<sup>17)</sup>と同様な結果を示しており、優れた指導者を求める声は、時代に関係なく普遍的なものと推察される。

次に「剣道の特性及び素晴らしさを明確にする」(11.7%)が上げられている。これは少子化にともなう剣道人口の減少に歯止めをかける上で今後多いに論議され明確化されなければならない点であろう。次には、「練習場所の確保」(8.6%)が上げられている。これは、諸外国において時折聞かれるが、国内においても少なからずこのような現状が認められたことは以外であった。今後、公共施設等のさらなる柔軟な開放が望まれる。

次に「剣道と学業の両立」(8.2%)、「基本を中心にしたのびのび剣道」(7.7%)、「試合偏重主義の改善」(6.8%)などが続いている。

以上に上げた問題点と改善点から考えられることは、基本に忠実で生涯を通じ年齢性別にとらわれず、幼少年から高齢者まで、健康で楽しい剣道

を育てゆく努力が指導者には望まれる。また、指導の面においては個人の能力や性格及び環境等も含め、個性を生かした指導方法及び指導内容の充実、改善が必要不可欠と考える。

【要 約】

本研究では地域社会において剣道指導に携わっている191名を対象に、アンケートによる調査を実施し、地域指導者の実態及び意識について検討した結果、次のような知見が得られた。

1. 地域社会における剣道指導者は、幼・小学生を対象に指導する機会が多い傾向を示した。
2. 剣道を指導する上で基本動作、打ち込み・掛かり稽古など、基礎的技術の練習に重点をおく、指導傾向が認められた。
3. 地域指導者の大半は、試合勝利主義でないことが示唆された。
4. 剣道指導の動機をみると、地域社会に関連した理由が高率を占め、地域に対する貢献及び奉仕志向の高いことが認められた。
5. 将来、剣道がこれまで以上に普及発展するには、「優秀な指導者養成」が最も重要視される傾向が認められた。

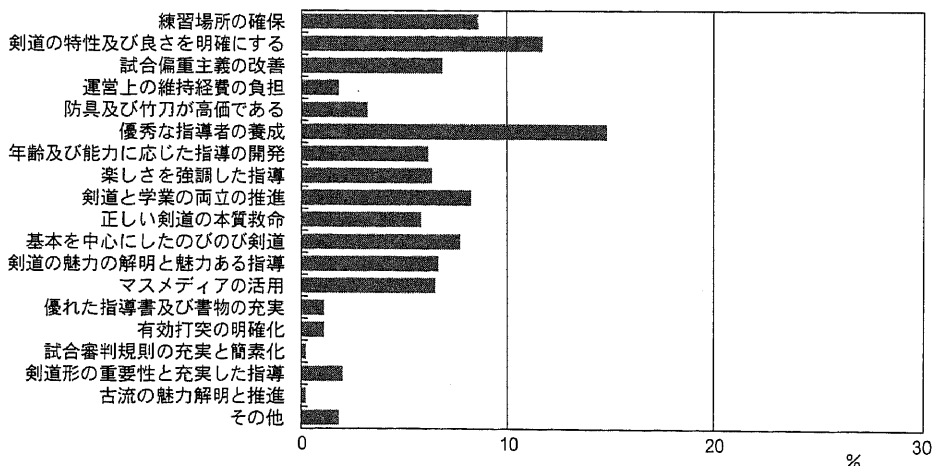


図7 剣道が普及発展していく上での問題点及び改善点



## 引用・参考文献

- 1) 月刊武道241号 (12月号). p44~47 1986年.
- 2) 田中鎮雄;「文部省の学校武道指導指針の史的展開過程(1)」。武道学研究 第13巻3号 1981年.
- 3) 月刊武道317号 (4月号). p118~121 1993年.
- 4) 小澤博;「シンポジウム:道場連盟における剣道人口減少の実態と問題点」。武道学研究 第27巻別冊 1995年.
- 5) 松村悦博他;「高校剣道指導に関する研究(その1)」。武道学研究 第18巻2号 1986年.
- 6) 武田正司他;「体育教師による剣道指導の特長」。武道学研究 第20巻2号 1988年.
- 7) 田中鎮雄;「高校格技指導の現状と問題」。武道学研究 第14巻1号 1982年.
- 8) 田中鎮雄;「高校格技指導者の意識構造」。武道学研究 第14巻3号 1983年.
- 9) 浅見裕他;「剣道指導者の剣道に関する意識についての一考察」。武道学研究 第32巻1号 1999年.
- 10) 武田正司他;「体育教師による格技指導の特長」。武道学研究 第16巻1号 1984年.
- 11) 武田正司他;「高校剣道部の指導に関する研究」。武道学研究 第17巻1号 1985年.
- 12) 飯塚剛他;「高校剣道指導に関する研究(その2)」。武道学研究 第18巻2号 1986年.
- 13) 飯塚剛他;「高校剣道指導に関する研究(その2)」。武道学研究 第19巻2号 1987年.
- 14) 前田シン子;「女子剣道のあり方に対する指導者の意識」。武道学研究 第11巻2号 1979年.
- 15) 全日本剣道連盟編;「幼少年指導要領」。1985年.
- 16) 田方千晶他;「学校教育における武道の指導者について」。武道学研究 第28巻別冊 1996年.